



外国語部会主催・学会後援



講演会

— 外国語の窓から見える世界 '10 —

学会外国語部会は今年、日頃外国語を教えていただいている非常勤講師の先生方をお願いして、以下のような内容の連続講演会を開催することにしました。先生方それぞれの専門分野における研究成果や、最近関心をお持ちのことなどを、分かりやすく、興味深い形でお話ししていただきます。

東京女子大学で第二外国語として開講されている5言語、独語・仏語・西語・中国語・韓国語は、世界に向かって開かれた5つの窓です。

この講演会は、世界の多様で立体的な姿を、私たちに垣間見せてくれるに違いありません。

10 / 29 (金) III (13:15-14:45) no.24201

長井 文 氏 (本学非常勤講師・フランス語)

「留学すること」

現在、日本人の海外留学者数は年間約8万人ですが、留学を希望する学生数は減少傾向にあるそうです。長引く経済不況や、若者の内向き思考がその原因としてよく挙げられていますが、留学のあり方自体が変わりつつあるのではないのでしょうか。インターネットの普及や経済のグローバル化によって、「現地に行かなければ分からないこと」が極端に少なくなってきたように思います。とりわけ世界中のありとあらゆる情報が集まる東京においては、その傾向は顕著でしょう。

そのような状況にあって、留学することにどのような意味があるのかを、自身のフランス留学の中で経験したことを踏まえて考えてみたいと思います。

11 / 5 (金) V (16:35-18:05) no.24201

千代 勇一 氏 (本学非常勤講師・スペイン語)

「南米コロンビアにおける違法作物(コカ)の栽培と政府の対策

—なぜ農民はコカを栽培するのか?—

南米コロンビアは麻薬コカインの世界最大の生産国であり、その原料である植物コカの栽培面積も世界の総栽培面積の約半分を占めています。麻薬ビジネスは生産国における政治、経済、社会の不安定化を促進するだけでなく、欧米を中心とする消費国では深刻な社会問題を引き起こしていることから、グローバルな問題として国際社会がその対策に取り組んでいます。しかしながら、コカイン精製のためのコカ栽培は依然として続けられているのが現状です。では、なぜ農民はコカを栽培するのでしょうか?

本発表では、フィールドワークの成果も踏まえてコロンビアにおけるコカ栽培の実態を紹介するとともに、政府のコカ対策が抱える諸問題を考察してみたいと思います。

*日程を10月19日から変更いたしました。

11/9 (火) II (10:55-12:25) no.7102

志真 斗美恵 氏 (本学非常勤講師・ドイツ語)

「ケーテ・コルヴィッツ——作品とその生涯」

ケーテ・コルヴィッツ (1867~1945) は、抑圧された人びとのたたかいを描いた連作版画『織工たちの蜂起』、そして『農民戦争』で評価をえて女性画家として出発します。第一次世界大戦で息子ペーターを失い、悲嘆にくれますが、たちあがって、戦争に反対し平和をもとめる作品を生涯かけて制作しました。

彼女の作品は、悲しみをみつめ、しかし悲しみに埋没せず、そこから脱却し、未来にむかう勇気と希望を与えてくれます。30年代に、ヨーロッパのみならず、魯迅によって中国に、そして日本にも作品は紹介されます。

ドイツでは、きわめて有名な画家ですが、日本ではそれほど多くの人に知られているとはいえません。「わたしはこの時代のなかで人びとに働きかけたい」(コルヴィッツ)と願って制作した作品とその生涯をたどり、その現代的意味を考えていきたいと思います。

11/19 (金) III (13:15-14:45) no.24201

竹原 真 氏 (本学非常勤講師・フランス語)

「12世紀西欧の『感情教育』
—トウルバドゥールの恋愛叙情詩を読む—」

今日、普遍的な感情とされる「恋愛」は、「12世紀西欧の発明」だとされている。その「恋愛」を叙情詩として俗語で謳い上げたのが、トウルバドゥールと呼ばれる詩人兼作曲家たちであった。ダンテをはじめ、後世の西洋文学者に多大な影響を与えた彼(女)らの詩を紹介し、比較文学ジェンダー論の観点からも検討してみたい。

12/10 (金) III (13:15-14:45) no.24201

張 劍波 氏 (本学非常勤講師・中国語)

「中国、日本、アメリカの比較から日中関係を考える」

実体験を踏まえながら、中国、日本、アメリカの比較を通して、国際関係学や文明史の角度から、世界における日本と中国、「中国が急激な発展を続けている。これは、大航海時代以来の世界史的な出来事」という局面に日本はどう対応するか、どういう日中関係が好ましいかなどについて共に考えたい。

12 / 16 (木) V (16:35-18:05) no.24201

Benjamin GIROUX 氏 (本学非常勤講師・フランス語)

「異邦人によって語られる「フランス物語」

ー堀江敏幸の作品におけるフランスおよびフランス人の^{イメージ}表象について

フランス文学研究者であり、同時に作家として活躍している堀江敏幸氏(46)の作品(特に初期の著作)においては、パリ郊外やノルマンディー地方など、フランスを舞台に東洋人(日本人)が主人公もしくは語り手として登場する作品が数多く見られる。そこでは、異邦人という視点から、フランスの風景や風俗はいかに語られ、描き出されているのだろうか。そうした「フランス物語」を読みながら、逆に日本で異邦人(フランス人)としている自分の経験を踏まえて、小説における異文化の表象について考え直してみたい。